「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 31 年　1　月　　16 日
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻・博士課程 5 回生
氏　名	横塚　彩

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

コンゴ民主共和国、チュアパ州ジョル県

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

大型類人猿ボノボに対する住民意識の多義化ーボンガンド民族に着目してー

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 30 年　9 月 26 日　～　平成 30 年　12 月　19 日　（85 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

CREF, WCBR(Wamba Community for Bonobo Research)

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

今回の調査の目的：
１．ボンガンド居住地かつボノボの生息地に作られたプランテーションはボノボの狩猟に関連があったか、プランテーションの規模と歴史を調査する
2. ボンガンド居住地における銃の流入とボノボ狩猟の関連性を調査する

1.調査を行なったプランテーション
1:ワンバ　　ゴム、コーヒー豆
2:イヨンジ　コーヒー豆、ゴム
3:ベフォリ　コーヒー豆、ゴム、ヤシ油
4:ヨカンバ　ヤシ油、ゴム
5:リココ　　コーヒー豆、ゴム

今回訪問したプランテーションはチュアパ州の５か所で、いずれもすでに操業が終了している。
これらのプランテーションは主に欧米人（ベルギーやオランダ人）によって、経営されていた。どのプランテーションも２平方キロメートル以上の規模があり、当時の使用人の証言によれば、多い時で数千人がプランテーションから仕事を得ていたという。民族もボンガンドのみでなく、周辺に居住する Mongo、Topoke、Batetela などボンガンドとは異なる文化を持つ人々も出稼ぎにやってきたという。遠くの使用人には寮も用意され、プランテーションの操業期を「豊かな時代」と語る村人もいた。

４を除く１, 2, 3, 5 のプランテーションは、1960 年 6 月の独立を機に外国人経営者が帰国、コンゴ政府役人の手にわたるも経営はうまくいかず、使用人への給料支払いは停止、数年でプランテーション事業は敗退した。

プランテーション調査地域におけるボノボ狩猟
1:ワンバ・・・1990 年代後半から勃発した内戦により、ワンバに駐留した兵士がボノボを食べた
2:イヨンジ・・・プランテーション事業とは関係のないところでボノボの狩猟、摂食があった（Lingomo and Kimura 2007）
3:ベフォリ・・・数人のインフォーマントから聞き取りを行なったが、この地域での摂食の話は聞かれなかった（他地域での接触経験者 2 人）
4:ヨカンバ・・・戦争以前から 2015 年以降も狩猟が行われる
5:リココ・・・　戦争以前から 2015 年以降も狩猟が行われる

2. ボンガンド居住地における銃の流入とボノボ狩猟の関連性
1）銃の流入
密猟者の可能性・・・戦争前まで（1980 年代後半-1990 年前半）象牙を目的とした密猟者が滞在していた。密猟者は何名かの村人をトラッカーのように雇い、森で象の狩猟を行なった。彼らの目的は象牙なので、

ボノボを撃つなどの「無駄撃ち」はしていない。また銃を村人に託して、象を撃たせるなどの行為もしていないという。密猟者から銃が村人の手に渡ることはなかったという。

戦争・・・兵士は村人の銃ではなく銃弾の管理をしていた。自身の身を守るためにも（？）戦争が終わっても銃を村に置いて去ることはなかった

上記にあげた証言から密猟者や兵士の駐留による銃の流入は考えにくい。では、村人が銃を手にできるようになったのはいつ頃か？
手製銃の職人やインフォーマント数名に話をきいたところ、村人が銃を手に入れることができるようになったのは、戦争が終わった 2002 年ごろ以降ではないかと考えられる。それ以前にも銃を所有していた村人もいたが、その多くが外国製の銃（AK47）であり、現金収入源が限られる在郷地の村人にとって、高価な外国製銃は手の届く者ではなかった。現在多くの狩猟者が所有しているのが村内で作られる手製の銃で、値段は 60,000FC 前後（40 ドル程度）で購入できる。

2）銃の流入以前のボノボ狩猟
銃が村に浸透する以前、ボノボはどのように狩猟されていたのか。多くのボノボ狩猟者の証言では、毒矢による狩猟が言及された。また戦時中は、兵士の駐留の有無にかかわらず、どの地域でも村人は森に逃げて一次キャンプをつくり数週間の短期間から 3 ヶ月以上の長期間森に滞在した。村人は兵士に見つからないように声を潜めて森に隠れていたという。彼らが森での生活の過酷さを語るとき、塩や主食となるキャッサバの不足をよく口にする。魚や動物などのタンパク源は比較的簡単に手にいれることができたという。地域によっては、森への避難期間に毒矢を使ってボノボを狩猟したという話も聞かれた。弓矢は手製で、毒も森から手にいれることができるので、銃が流入する以前は大型動物を狩猟するためには毒矢が一般的に多く用いられてきた。

何がボノボへの禁忌をこわしたのか
プランテーションの設置や密猟者の存在はボノボの個体数に影響をあたえたか
プランテーションを設置するには森を大きく開かねばならず、通常村人が開く畑のように休閑期間も設けられない。物理的な habitat loss を考えることは可能である。しかし、ボノボの禁忌を持つ民族が居住する地域に、他民族が多く流入したことで禁忌が壊れたと考えられるのか。プランテーションの多くは、外国人経営の手が離れたコンゴ独立と同時に廃業状態に追い込まれている。1960 年代以前の狩猟方法を考えると、家族で行う網猟か毒矢での狩猟法があげられる。網猟はグエノンなどの猿やイノシシを捕まえる時に用いられるため、大型の動物であるボノボの狩猟には向かない。また、毒矢猟でボノボを狩猟することは容易ではなく、たとえ狩猟できたとしても、地域の禁忌を大きく変化させるほど流通があったのかは疑問である。
ただし、4 の地域のように他民族の関わりが禁忌の崩壊を招いた事例もある。ヨカンバは、ボンガンドの居住地ではあるが、幹線道路を南にいくと他民族モンゴの分布地域となる。モンゴは、ボノボへの禁忌がない民族であるが、プランテーションが終了したのちも、多くのモンゴはヨカンバに居住を続けたという。その理由として自身の出自の村からヨカンバが遠くないので、開いた畑を所有したり生活基盤をつくったものは自分の村に帰らずに、ヨカンバでの生活を続けているという。ボンガンドの分布地域でありながら、ボノボの摂食率が高いヨカンバで話を聞くと、モンゴの影響を受けてボノボを摂食するようになった村人の話も聞くことができた。
ボノボの狩猟が活発に行われ始めたのは、村に銃が流通するようになってからだと考えられる。それは、どの伝統的な狩猟方法をもってしても簡単に狩猟ができる動物ではないからだ。そのように考えると、プランテーションの設置による他民族の流入は時代背景を考えてみても、ボンガンドのボノボへの禁忌に大きな影響があったとは考えにくい。銃の流通や、食料不足、現金収入源がないことなど、他民族との交流以外のところでボノボへの禁忌が崩れたとも考えられる。

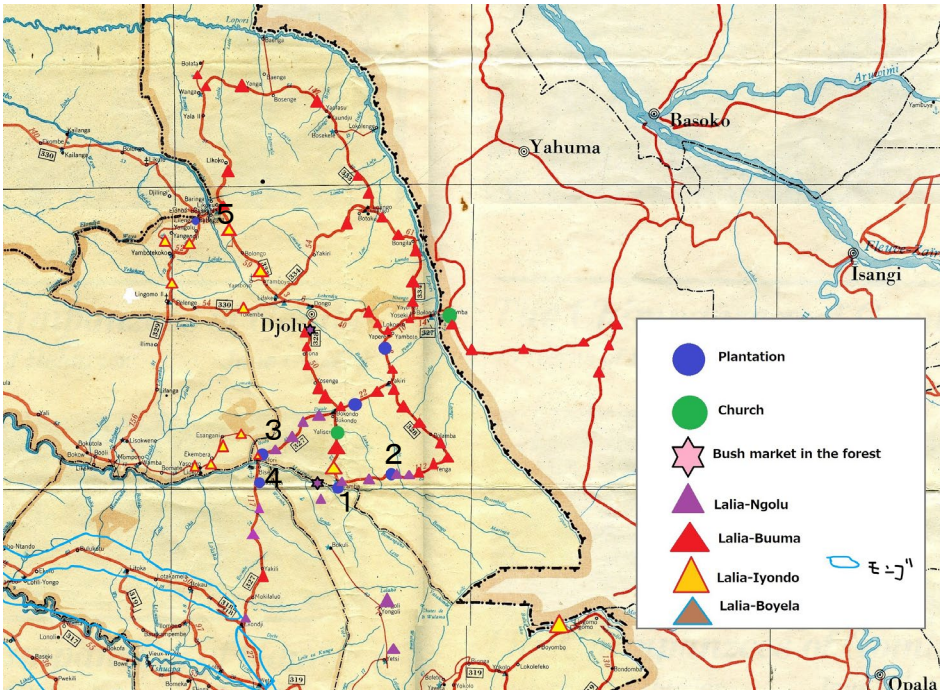
ボノボはどうすれば守られるか
ワンバのボノボが残った理由を考える
多くのインフォーマントからの情報や文献をとおして、なぜワンバのボノボがほぼ狩猟されずに残ったのか考えてみた。
１．ボノボ研究
２．狩猟方法
３．銃の取り締まり
1973 年にボノボ研究が始まり今日まで継続されていること、1973 年以前のボノボを狩猟可能な方法が毒矢のみだったこと、1974 年に政府による銃の取り締まりがこの地域であったこと等、ボノボの狩猟を直接的に取り締まるものではなくても間接的にボノボの狩猟が規制された。

援助があればボノボを守れるのか
ボンガンドの分布域を対象に、800 人を超える村人から話を聞いてきたが、保護区外の地域でボノボへの伝

統的禁忌を継続させていくことは、容易でないということがわかった。どんなに国際基準で保護動物であると地域住民に説明しても、最低限の生活で毎日を生き抜く彼らにとってはそれが骨身にしみる語り方とは考えられない。ワンバに近い地域の住民はボノボと支援や援助を一緒に考えている傾向があり、「ここにもボノボがいるので、ぜひ視察にきてほしい」という要望を多く聞く。ボノボの生息地域のほとんどが保護区化されていない中、支援の投入は地域にどんな影響をおよぼすのであろうか。

Conservation de Bonobo Lingomo の事例
いくつかの地域で話をきいていくなかで、村人自らの力でボノボの保全活動を行なっている保護区の責任者から話を聞く機会を得た。資金元は欧米のボノボ保護団体だが、その資金をもとにトラッカーの雇用や、村人との毎月の話し合いの場を設けたりしているという。資金は２年間支給されたあと、継続されていないというが、いまだに村人は、ボノボの狩猟をやめているという。追加の援助がないなか、どれくらいの期間ボノボへの狩猟の規制が続くのか経過を追っていく必要があるが、外からの支援が村人をエンカレッジしたよい例である。

PWS では、コンゴ民主共和国で 6 回の現地調査をさせていただいた。
今回の報告を含め、今までの調査で多くの地域住民から得たデータをもとに博士論文を執筆予定である。
伝統的な禁忌がどのように変容しているのか、明らかにしていきたいと思う。



地図）今回訪問したプランテーションの位置

６．その他（特記事項など）